

『百人一首』 中村素堂先生の仮名散らし書きの魅力 (三)

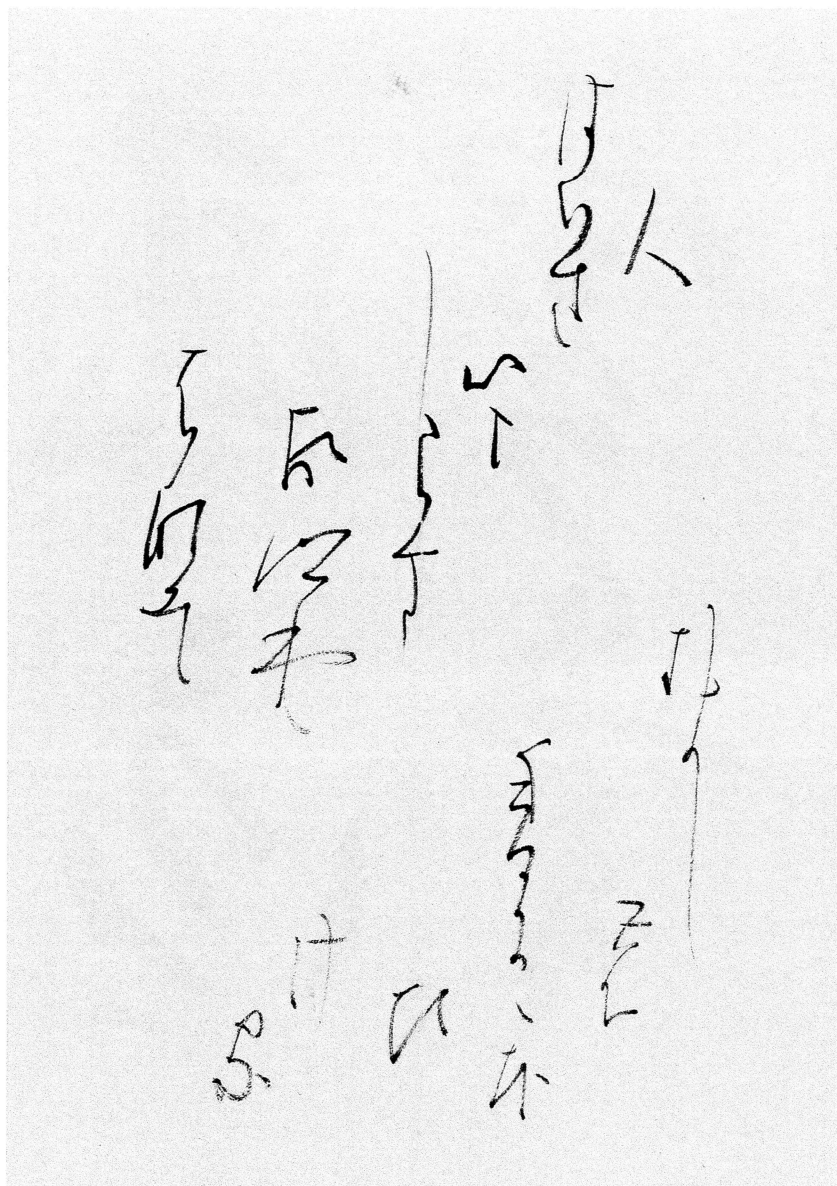
人はいさ心も知らずふるさとは 花ぞ昔の香かににほひける

紀きの貫つらゆき之

〈歌意〉

「人は、さあ、心変わりしたかどうかわからないが、昔なじみのこの里では、梅の花だけは変わらぬ香りで咲きにおっていることだ。」

〔出典〕『古今集』(雑・九〇九番)



〈紀貫之〉

貞観一〇(八六八)年ごろ

天慶九(九四六)年。

〈よみ〉

人 むかし

はいさ 農

心も 香尔、本

しらす ひ

故郷盤 け

者那そ 累

中村素堂先生の書

書間欽堂先生提供